今、一楽思想に学ぶべき時

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

蔦谷　栄一（つたや　えいいち）

東北大学経済学部卒業。1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

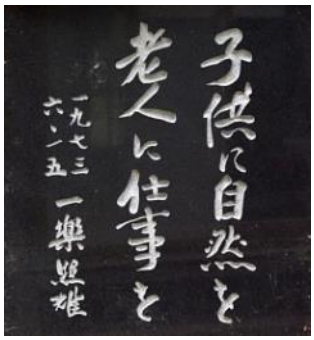
筆者は73歳になったが、今、しみじみいい言葉だなと思う一つが、「子供に自然を　老人に仕事を」である。これは、有機農業研究会を立ち上げた一楽照雄が好んで揮毫（きごう）した言葉で、年を重ねるほどに、その言葉の重みを実感する。

都市化が進行し、核家族化が進み、管理社会が徹底するほど、都市の農地と緑は減少し、残された緑も公園や街路樹のような管理された緑ばかりで、水辺もほとんどはコンクリートで固められている。もはや都市で自然と称されるもののほとんどは、人手によって造られ、管理されるものばかりだ。だからこそ、子供たちに本物の自然に触れさせ、体験させていくことが欠かせない。一方、退職後、特に男は時間の使い道に困り、家に居ても粗大ごみ扱いされ、身を縮めて生きるしかない人も多い。その意味で年を取っても畑仕事が残されている農家は恵まれている面もあり、心身の健康のためにも年相応にできる仕事を持つのが理想だ。まさに至言と言える。

年は更けてしまったが、過ぐる2021年は有機農業研究会が発足してから50周年であった。同会が機関誌「土と健康」の10月号を50周年記念号として特集を組んだ以外は、めぼしい動きはなかったように思う。一楽の出身母体である農協系統でも一楽をしのんで集会などを設けたという話は耳にしない。もはや一楽を知る者自体がずいぶんと減ってしまったようだ。

1906年生まれの一楽は、わが国の有機農業運動の先駆けとして有機農業研究会を立ち上げ、産消提携を打ち出すなど、日本の有機農業とともにこれを支える消費者運動をもリードしてきた。並行して農住都市建設構想をも提唱してきた。これらは主に協同組合経営研究所時代の取り組みであるが、その前の農林中金・全中時代には、農協草創期の赤字発生に伴う「整備促進」といわれる農協や事業連の経営立て直しを図り、並行して販売・購買の経済事業と連動した協同組合の特質を発揮した組合金融の構築に注力した。また運動理念の徹底と体質改善を目指すとともに、生活視点からの改革にも取り組んだ。

一楽照雄伝刊行会が取りまとめた「暗夜に種を播く如く」（農文協販売）によれば、一楽は理想と現実とのはざまで葛藤を繰り返すとともに、路線上の対立と挫折も味わい、「成功はひとつもなかった」と述懐してもいる。しかしながら、一楽がまいた種は確かに芽吹き、成長して、50年後の国の「みどりの食料システム戦略」を導き出すのに大きな力となったことは疑いようもない。



山形県高畠町・和田民俗資料館前の一楽揮毫による記念碑（和田民俗資料館HPより）

一楽は戦後の動乱期、高度経済成長期、そして低成長経済移行期と、その都度、直面する問題・課題と格闘してきたが、常に現在の取り組みを次の時代への礎とすべく、問題の背景にある本質を見定めながら未来への道を模索し続けた。そしてその基本には「自立・互助」の精神があった。

今、経済成長の限界が明らかになるとともに環境問題は深刻化し、格差社会とコミュニティーの分断、管理社会の徹底が進行する中で、生きにくさは募るばかりである。一楽であれば、こうした状況をどのように捉え、次の方向性をどう見いだし展開していくであろうか。改めて一楽照雄を訪ね学び、時代と向き合うべく本源的力をもらっていくことが必要とされているように思う。